



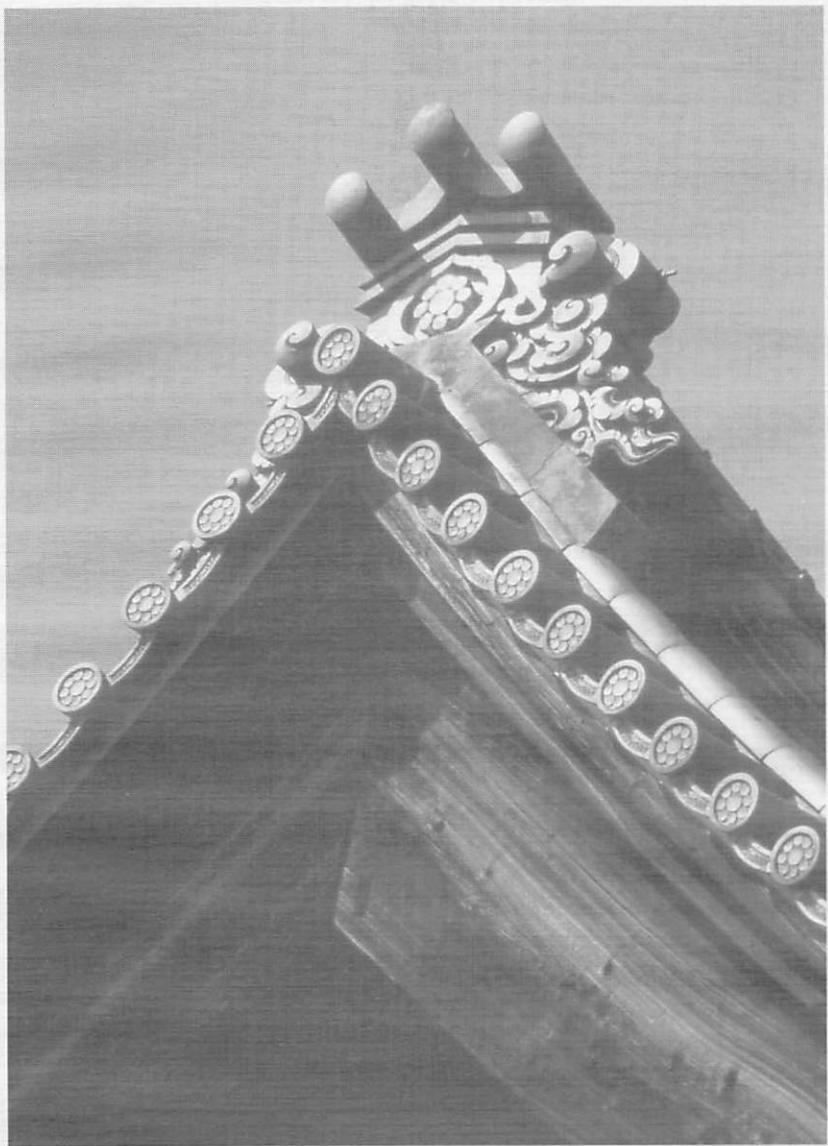
龍藏寺の歴史

龍藏寺の歴史



貞元八十三年夏

龍藏寺の歴史









木造阿弥陀如来立像

前々頁写真：山門、右写真：大銀杏



本堂

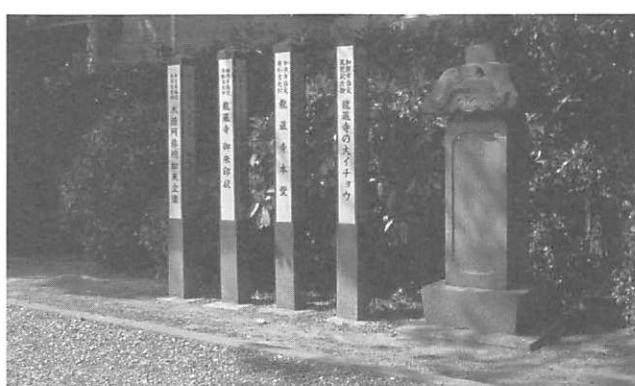
まえがき

数年前、法事の折、檀家の桜井健一氏より、『龍藏寺の歴史』といつたものがあれば、といわれたことがあった。しかしその時、十分なものがなく申し訳ないなと思ったものである。その後、小冊子を作つてみたが、やはりどこか不十分であつた。他方、私が死んでしまえば、多分、失われてしまうだろう龍藏寺に係わるもののが今、私の頭の中にある。

これが『龍藏寺の歴史』を作ろうとする理由になつてゐる。檀信徒の方々のニーズに応えられたらと思うものである。

龍藏寺とは不思議な寺である。旧水深村は十の村が合併してできた。そして、小さな村ごとに寺があつたし、今もある。ところが龍藏寺の檀家は小さな村の単位を超えて、存在している。すなわち、明治二十年の時点で加須町、不動岡町、下谷村、岡古井村、上下三俣村、北篠崎村、北小浜村、礼羽村、馬内村、戸川村（八ツ田家）、田カ谷村（岡家）に分布している。まさに国際的であった。その大きな原因は、龍藏寺が徳川家の菩提寺の宗である浄土宗であつたこと、御朱印状をいたいでいたこと、それに加須、不動岡の街が発展したこと、と考えることができる。

私の曾祖父の由木觀宏は岐阜で生まれ、京都の富小路にある本覺寺の住職を経て、増上



寺の命により、芝の増上寺の良雄院から、増上寺を徳川家の菩提寺に導いた觀智国師の家名である由木をいただき、明治七年（一八七四）十一月五日に龍藏寺に入った。以後、観定、觀瑞、隆定、義紹と無事やつてこられたのも、神仏の加護の下、皆様のおかげと加須地域の発展があつたからと思うものである。

ちなみに、歴代の上人の名前を列挙すれば次のとくである。また、この師弟のつながりは血脉ともいわれ、龍藏寺の弟子になつた人には必ず授けられるものである。

教藏上人（一世）	明徳元年（一三九〇）正月二日没
心海上人（二世）	応永十六年（一四〇九）三月六日没
蓮海上人（三世）	永享三年（一四三一）三月一日没
傳海上人（四世）	寛正元年（一四六〇）五月二十九日没
信阿上人（五世）	文明十八年（一四八六）四月十三日没
峩月上人（六世）	永正十二年（一五一五）六月十日没
儀翁上人（七世）	天文六年（一五三七）九月十六日没
峩玄上人（八世）	永禄四年（一五六一）十月八日没
峩貞上人（九世）	天正十八年（一五九〇）三月八日没



良然上人（十世） 元和二年（一六一六）六月六日没

教譽上人（十一世）

寛永十年（一六三三）七月十七日没

英譽上人（十二世）

正保二年（一六四五）二月二十日没

幡譽上人（十三世）

明暦二年（一六五六）二月十五日没

檀譽上人（十四世）

清譽上人（十五世）

吽譽上人（十六世）

演譽上人（十七世） 延享元年（一七四四）正月二十一日没

眞譽上人（十八世）

道譽上人（十九世）

最世上人（二十世）

愍譽上人（二十一世）天保六年（一八三五）十一月七日没

元譽上人（二十二世）文久二年（一八六二）二月十一日没

念譽上人（二十三世）明治四年（一八七一）七月二十三日没

進譽上人（二十四世）龍藏寺以外の場所に埋葬される。

三譽上人（二十五世）觀宏、明治三十四年（一九〇二）五月十九日没



得誉上人（二十六世）観定、昭和三年（一九二八）五月七日没

慧譽上人（二十七世）觀瑞、後、慶岩寺住職

明譽上人（二十八世）俗名、斎藤厚順、龍藏寺以外の場所に埋葬される。

諦譽上人（二十九世）義紹、平成十三年（二〇〇一）七月二十七日没

さて、このようなことを書いているうちにも、書き忘れたと思うことが多々でてくる。

その一つが本堂再建に係わることである。

それは今の本堂の前の本堂が火災で焼失した時が文政六年（一八二三）一月二日か、それとも文政九年の一月二日かということである。これについては不明である。落慶は天保十五年（一八四四）とあるが間違いのように思える。というのは境内で、再建中の本堂の瓦を作ることの許可願いが、弘化二年（一八四五）正月にだされているからである。

二つは天保五年（一八三四）六月二十四日の打ちこわしに係わることである。

打ちこわしの暴徒は龍藏寺に集まり、早鐘を打つ。その時、住職はそれを阻止しようとするが、刃物で脅迫されたということである。そして、暴徒は打ちこわしをしない見返りに、名主に六十四両を要求するが、それができず住職が立て替えをする。実はこの金は本堂の再建費に思えるのである。

三つ目は龍藏寺二十一世懸誓上人に係わることである。

彼は「踏んだり蹴ったり」の上人である。というのは彼は本堂を火災で焼失し、次いで再建にとりかかり、その途中で打ちこわしの暴徒に刃物で脅迫され、落慶に立ち会うことなく、天保六年（一八三五）に亡くなっているからである。ただ、そのような中にあつても、驚嘆すべきは文政九年（一八二六）七月に「龍藏寺縁起文」を書き残していることである。

いずれにしても、『龍藏寺の歴史』を通して、龍藏寺の歴史、皆様のご先祖様の歴史を少しでも知つていただけたら、ありがたいことです。

なお、「龍藏寺の文化財」の執筆は新井智恵子氏、「護国青年道場」の執筆は鈴木佳男氏にそれぞれお願ひし、銀杏と山門の写真は藤野ひろ子氏の撮影なされたものを使わせていただきました。全体のご指導については早川清氏に、また編集・出版に関しては畏友の井上昭彦氏にお世話にあずかりました。皆様に深く感謝する次第です。ありがとうございました。

表紙の絵は龍藏寺に眠っている堀越雪兆の「近世農作業絵図」（明治十五年）です。

一〇〇三年五月十七日

龍藏寺 三十世 由木義文





龍藏寺の歴史

目次

まえがき



第一章 龍藏寺の沿革	1
鎌倉時代	1
南北朝時代、室町時代	2
安土桃山時代、江戸時代	4
明治時代、大正時代、戦前	7
戦後	9
	13
第二章 龍藏寺の文化財	15
木造阿弥陀如来立像	16
青石塔婆（板碑）	18

本堂	3
山門	4
二十三夜堂	5
淡島觀音堂	6
鐘樓堂	7
龍水井戸	8
大銀杏	9
御朱印状	10
第三章 護國青年道場	33
第四章 龍藏寺に係わる史料	53
龍藏寺縁起文	54
龍藏寺と教藏	55
古仏眼山号の由来	57



第一章 龍藏寺の沿革

1 鎌倉時代（一一八五—一二九三）

龍藏寺に残されているもので、最も古いものは、ご本尊の阿弥陀如来である。永仁元年（一一九三）十一月二八日に造られたものである。

鎌倉時代は宗教の面からみると、鎌倉仏教が誕生した時代でもある。それらは法然の淨土宗、親鸞の浄土真宗、栄西の臨濟宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗である。法然は口に南無阿弥陀仏を称えれば極楽に往生できると説き、弟子の親鸞は阿弥陀仏を信じ、お任せすれば、極楽に往生し、悟りを開くことができる、と説いた。また、栄西、道元は禪を実践することにより、悟りを開くことができるとした。さらに、日蓮は南無妙法蓮華経と唱えれば救われると主張したのである。

龍藏寺の阿弥陀如来はこれらのうち、親鸞の流れをくむ人々が造つたものである。そのことは、仏像の頸部胸部の内側に、この仏像は性信上人の弟子の唯信によつて、十一月二八日に造られたと記されていることからうかがえる。性信とは親鸞の高弟であり、十一月二十八日は親鸞の命日である。

法然の信仰が盛んになると共に、様々な迫害が法然の教団に加えられ、やがて承元元年

阿弥陀如来
龍藏寺本尊（一一九三造立）
国の重要美術品
県の有形文化財

(一一〇七)には法然は土佐に、弟子の親鸞は越後に流される。親鸞は流罪が許された後、新しい布教の地を求めて、関東に入つてくる。途中、佐貫（今の群馬県板倉付近）で衆生利益のために、浄土三部経を千部読もうとしたことが伝えられている。実は現在、板倉には性信上人のお像が残されている。さらに興味深いことは、この像と龍藏寺の阿弥陀如来の像の画工の一人が板倉の信証であるということである。

いずれにしても、龍藏寺の阿弥陀如来は親鸞の関東布教の中から生まれてきたということである。現在、国の重要美術品であるのみならず、真宗の宝物でもある。

2 南北朝時代、室町時代（一三三三—一五七三）

鎌倉から室町にかけて、関東地方では青石塔婆といわれた板碑の信仰が盛んであった。

青石塔婆
第二章2参照

これは死者の追善供養や現世の安穏な生活を願い造られたものである。龍藏寺にも十基くらい残されている。觀応元年（一三五〇）、文和三年（一三五四）、貞治七年（一三六八）の年号入りのものも見られる。

龍藏寺の縁起文によると、龍藏寺は文和四年（一三五五）に教藏上人によって創建されている。

縁起文には次の様な話が伝えられている。現在の龍藏寺のあるところは、文和の頃は利

三俣の地名の由来

根川が流れ、鬼島と明知島により、流れは三つ又に分かれていた。このため、三俣といふ地名が起つたといわれる。この三俣の地にやってきた教藏上人は住民より、鬼島には人々を悩ます怪物がいることを伝えられ、それを退治すべく、島に庵を作り、南無阿弥陀仏と称え続けていた。すると、七日目の夜に女人が現れ、十念（十遍の南無阿弥陀仏）を授けてほしいと願つた。十念を受け終わると、女人は百丈もある白龍にかわり、七曲りに

体をくねらせ、やがて消えてしまったという。以後、人々は怪物に悩まされなくなつたといふ。そして、白龍の頭のところに寺を建立し、白龍の龍と教藏上人の藏をとつて龍藏寺と名付けた。龍の尾のところには弁天を祀り、また七曲りしたところを七曲りと呼んだ。さらに、龍頭と龍尾のところに銀杏の木を植えたとしている。龍藏寺と諏訪神社の銀杏の木（市の天然記念物）がそれである。

教藏上人とは浄土宗の血脉によると、鎮西派の中の藤田派の流れに属す人で、

法然・良忠・性真（藤田派一世）—持阿（二世）—持名（三世）—唱名（四世）—教藏、といふ流れにある。唱名上人は現在は樋遭川にある聖徳寺を寺ヶ谷戸に建てた人で、教藏上人の師にあたる人である。なお、龍藏寺には教藏上人の姉についての伝承が残されている。それは上人の姉が馬内の伊藤家（現、伊藤弘氏の家）に嫁いだという話である。

龍藏寺は現在は古仏眼山 龍藏寺というが、元々は仏眼山 龍藏寺といつていた。それは次のような理由である。伝承によると、教藏上人は仏舍利、阿南の払子、玄宗皇帝親筆の淨土三部經、それに釈迦の左眼（仏眼）などを所持していたといわれる。このため、この仏眼にちなみ、仏眼山といわれるようになつた。しかし、龍藏寺は天和元年（一六八一）七月十日に火災にあり、岩槻の淨国寺に預けられていた仏眼以外すべて、消失してしまつてゐる。なぜ、仏眼が淨国寺に預けられたかといえば、戦乱の続く中、寺の維持が困難に

龍藏寺の由来

第四章 龍藏寺に係わる史料参照

銀杏

市の天然記念物

血脉(けちみやく)

師から弟子に法門が受けつがれる
こと、そのつながり。

なり、十両の借金の担保となつていたためである。

ところが、後にこれを受け戻そうとしたところ、淨国寺の僧は欲心を起こし、十を千に変えたため、それを取り戻すことができなくなつてしまつた。このため、龍藏寺は古仏眼山といい、他方淨国寺は仏眼山というようになつたといつのである。

龍藏寺創建時に現在の阿弥陀如来が龍藏寺に安置されていたかどうかという問題が残る。しかし、この点に関しては史料もなく、不明である。ちなみに、阿弥陀如来像は天保十四年（一八四三）と慶應元年（一八六五）に修理されている。

古仏眼山
第四章

龍藏寺に係わる史料参照

3 安土桃山時代、江戸時代（一五七三—一八六七）

信長、秀吉そして家康によって、天下統一がなされ、時代は徳川幕藩体制という強固な社会体制にまとめ上げられていく。

増上寺の僧、存応（後の観智国師、由木の出）は北条を破り、関東に入ってきた家康を黒豆のお粥で迎える。このことがあって、存応と浄土宗の信者であった家康との関係が開かれ、やがて増上寺は徳川家の菩提寺となり、場所も現在の芝に移された。

より強固な体制にすべく、寺もその役割を担うことになる。特に関東には学問寺として、十八の檀林がつくられていく。近くでは岩槻の浄国寺、鴻巣の勝願寺、館林の善導寺がそれである。龍藏寺や聖徳寺が檀林になれなかつた一因として、存応の血脉と異なつていたからとも考えることができる。龍藏寺は藤田派であるのに対し、存応は鎮西派の中の白旗派であつたからである。ちなみに、春日部の出の呑龍上人は藤田派の血脉をうけ、後にさらに白旗派の血脉もうけているくらいである。

そのような状況にあつて、しかも浄土宗の主流から外れているとはいえ、徳川幕府から、

檀林

仏教の学問所で、浄土宗の関東十八檀林はよく知られている。

慶安二年（一六四九）の家光から始まり、九人の將軍より、二十二石の領地（龍藏寺領）と

諸役免除を与える御朱印状（市の文化財）をたまわつてゐる。江戸時代、その権威は絶大

御朱印状
市の文化財

なものがあつた。今の土手と大門町の境を流れる会の川にかかる橋を徒步橋あいの川というが、そこから龍藏寺までは左右に大きな松並木のある参道であつた。橋の土手よりのところには「下乗」の立て札が立てられ、住職と徳川家の関係者以外は乗物を下り、歩いて行かなければならなかつた。もしそれを破ると、寺侍と野次馬に馬や駕籠をとられ、多分の酒代までとられ、さんざんな目にあつたといふ。

御朱印の権威と共に、檀家であつて、キリストンではないことを証明する寺請制度も加わり、龍藏寺は多くの人の檀那寺（菩提寺）として、発展していくことになる。なお、文政三年（一八二〇）の時点での寺の境内地は一万六千四十九坪（現六千坪）あつたといわれる。

天和元年に火災にあつたが、文政九年（一八二六）一月にも火災にあつてゐる。火の番の不始末が原因といわれる。このため、川俣村（羽生市川俣）の工匠、三村正利により、本堂（市の文化財）が造られ、弘化二年（一八四五）以後に落慶し、現在に至つてゐる。

寺請制度
檀那寺
菩提寺

4 明治時代、大正時代、戦前（一八六七—一九四五）

徳川幕藩体制という強固な政治体制も幕末にむかって漸次、綻び^{ほころび}が生じてくる。それに伴い、おかげ参り、また凶作、飢饉などにより、打ちこわし、一揆が起つてくる。加須にも天保五年（一八三四）に打ちこわしが起こり、龍藏寺の演識（二十一世懸督、天保六年十一月七日没）という住職が次のようなあり様を書き残している。

六月二十四日の夜に龍藏寺の境内に顔を隠した三十人くらいが集まり、無断で早鐘を打ち始めた。すると、二百人余りが駆けつけ、十時頃から加須の町の人家を打ちこわし始め、翌朝七時頃に帰つて來た。飲食の後、また打ちこわしの相談をし始めた。暴徒は名主などが六十四両だせば乱暴はやめるとしたが、工面ができなかつた。そのため、住職がそれをたてかえ、渡した。すると、暴徒たちはいざこかへ行つてしまい、午後三時頃には静かになつた。

明治に入り、日本は様々な制度の改革をしながら、富国強兵の方向に進んでいった。宗教の面からみると、明治五年（一八七三）に修驗道廃止の令が出され、廢寺になる修驗道

富国強兵
修驗道廃止

の寺が出はじめた。その一つが羽生の大聖院である。その山門は龍藏寺に移築され、現在に至っている。その折、樽代（御祝儀）として、二百匹を払つたという証文が残つてゐる。松村勝氏によると、龍藏寺の阿弥陀如来の左右に安置されている観音と地蔵も大聖院ものだとしている。なお、山門の古仏眼山の額は富塚家より明治十一年に寄進されたものである。

二百匹
寛永通宝、一千枚のこと。

江戸から明治にかけ、加須が経済的にも豊かになるにつれ、檀家も増え、農村の地主の大檀那に加え、町の商人にも大檀那といわれる人たちが出現してくる。例えば、町には富田、かんの薬の大和といった商家がそれである。山西の富田家や箱富田家は一説には今の大檀那に加え、町の商人にも大檀那といわれる人たちが出現してくる。また、暖簾分けによつて、川田家が生まれてくる。さらによりよい医療を得るべく、富田家や川田家は東京大学から医者をよんでくる。それが現在の篠原医院であり、縁が縁をよび、すべて龍藏寺の檀家になつてゐる。そして、町や農村の富の蓄積はやがて龍藏寺の発展にもつながり、それは明治二十八年八月（二十五世、三番代）に寄進された本堂の天蓋となつてくる。これは仏師の高村東雲（高村光太郎の祖父）によるものである。本町の清水の山車の蘭陵王面も同じ作者である。ちなみに、寄進者の名を挙げれば次のような方々である。

高村東雲
蘭陵王面

発起人

梅澤新年、梅澤宗太郎、梅澤房次郎、田村善次郎、新井左右平

大字上下三侯

梅澤八右衛門、菊地寛隆、野本松五郎、廿柒慶次郎、松永伊三郎、金子利之助、帶津平六、渡沼文左衛門、梅澤與右衛門、梅澤太次郎、橋本喜左衛門、新井吉重郎、小林文藏、鈴木三右衛門

加須

柿崎政次郎、大和元之助、根岸七兵衛、富田政五郎、富田四郎兵衛、富塚勝三郎、岡福次郎、網野茂兵衛、斎藤松五郎、矢嶋佐多、阿部正三、中村森藏

不動岡

塙田雄三郎、高橋三郎右エ門、高橋幸右衛門、川名渡一

多門寺

網野長左衛門

北小浜

鈴木吉十郎、橋本彌二郎、田部井章一郎、浅野應助、小林宇三郎

北篠崎

柿崎新蔵

東京八丁堀

高橋治兵衛

ところで加須の食文化の一つはうどん、いが饅頭、あんびん餅である。戦前の加須の商店（川田家）の当主の初七日に千二百個のあんびん餅が配られたという話が残されている。

町や農村の発展と共に、龍藏寺は発展していく。

第二次世界大戦の頃、昭和十六年に塙田新一氏により護国青年道場が龍藏寺に創設され、護国精神の高揚につとめた。また、戦争末期には神田の千桜小学校の生徒が戦火を避け、疎開をしていた。

護国青年道場

第三章 護国青年道場参考

加須の食文化
うどん、いが饅頭、あんびん餅

5 戰後（一九四五—二〇〇三）

昭和二十一年から二十三年にかけ、食糧事情が悪かつたこともあり、年に二百人もの方が亡くなられた。他方、農地改革に伴い、寺の経済に若干の影響がでたものの、檀家の方々の力により、困難な状況も乗り越えることができた。昭和三十年初め頃と記憶しているが、一つの事件があつた。それは創価学会に入信した檀家の方の葬儀、埋葬の件で、創価学会と宗教上の論争が一日中行なわれ、警察もでたということである。

いずれにしても、平成が始まるまでに、本堂や山門の瓦替え、会館の建設がなされた。他方、平成三年四月には加須市川口に火葬場（メモリアルトネ）が稼働し始めたため、土葬から火葬への大転換が起こった。平成十一年十二月には俱会堂もつくられ、現在に至っている。

土葬から火葬への大転換

俱会堂（くえどう）

「阿弥陀經」の俱会一処（極楽で俱に會うという意味）という言葉に基づき名付けられた。



第二章 龍藏寺の文化財

1 木造阿弥陀如来立像

この像は永仁元年（一二九三）、鎌倉執權北條貞時の時代に造立された。

像は螺髮で玉眼入り、來迎印を結び、像の高さ九十七センチメートルの寄木造りである。顔の肉づきが厚く、がっしりとしたからだ付きで力強い。複雑な納衣、頭髮際のゆるい波形などは鎌倉時代の作風をよく伝えている。

なお、像の顔、胸、両手先の金箔、および頭部、体部の彩色、光背、台座等は全て後補で、それらは胎内納入修理木札により、天保十四年（一八四三）と慶応元年（一八六五）に修理されたことがわかる。頸部、胸部の内側に次の墨書銘が示されている。

（頭部墨書）永仁元年癸巳十一月二十八日

（胸部墨書）奉造立阿弥陀如来像一軀

大勧進性信上人御門弟別當唯信 （花押）

仏師武州慈恩寺大進 （花押）

画工武州上野国江田明信 （花押）

同工同国　　板倉信証（花押）

この銘によつて、この阿弥陀仏が永仁元年十一月二十八日、すなわち親鸞聖人の命日に性信上人の門弟の別當唯信の勧進により造立され、仏師は慈恩寺の大進、画工は上野の江田の明信と板倉の信証であつたことがわかる。

性信上人とは浄土真宗を開いた親鸞聖人の高弟の一人である。このことにより、この像が親鸞聖人の関東布教の流れの中から、誕生してきたことが知られる。国の重要美術品であり、昭和三十九年三月二十七日に県の有形文化財に指定されている。



2 青石塔婆（板碑）

青石塔婆とは亡くなつた人の追善供養や自らの現世の安穩を願い、鎌倉時代から室町時代にかけ、関東地方で盛んに立てられた緑泥片岩で造られた塔婆である。

龍藏寺には觀応元年（一三五〇）のものより、文和三年（一三五四）、貞治七年（一三六八）など約十基見られる。また年号はないが南無阿弥陀仏と記されたものも残されている。

3 本堂

天和元年（一六八二）七月十日、火災に遭い堂宇、什物、寺宝を焼失している。さらに文政九年（一八二六）一月二日にも本堂より出火し、堂門、仏像、経巻、仏具類はもろんのこと、楼門、庫裡、宝庫を焼失するという大災難をこうむつている。

再建に着手したのは天保六年（一八三五）で、落慶は天保十五年（一八四四）ともいわれる。

入母屋造りで瓦葺きは当地における江戸時代を代表する木造建築である。面積は三三〇平方メートルで、市内でも数少ない大規模なものである。設計、建築に携わったのは羽生市本川俣の工匠三村正利で、歴代名匠の家柄といわれ、当時の北埼玉郡内の神社仏閣を数多く手掛けている。



堂内内陣の天井には、新井篤藤原月村筆による龍の絵と、根岸度雄筆による天女の絵が描かれている。さらに外陣には仏師高村東雲の手による天蓋^{てんがい}が光り輝いている。



4 山門

仁王像を安置した楼門造りで、明治の初期に羽生の大聖院から移築したものである。寺院整理によつて廃寺となつたため、正覺寺との交渉により、買い取つたものである。寺当時の古文書に次のように記されている。

覚

一 金貳百匹

右者大聖院樓門引取候ニ付而者、為樽代

(右は大聖院樓門引き取り候うに付きては樽代と為す)

書面之通御渡シ被成慥ニ被受納候以上

(書名の通り御渡さるもの成り慥なじかに受納せらるる候う)

羽生町場村

惣兵衛 印

同



新兵衛印

四月十八日

三ツ俣村

弥市右衛門殿

※・樽代とは祝儀などで、酒の代わりとして贈るお金のこと。

・二百匹とは寛永通宝、二千枚のこと。

山門は葛西用水を利用して運ばれてきた。楼門内には閻魔大王の坐像、釈迦如来、普賢菩薩、文珠菩薩の脇侍像わきじやうがあり、その周囲には寄進された箱入りの板東札所三十三観音、および秩父札所三十四観音像が並んでいる。

「古佛眼山」の扁額は明治十一年、富塚勝三郎家から寄進されたものである。大正八年、修繕、昭和六十一年、瓦替え、そして、平成八年十二月、仁王像の修復が行なわれた。



5 一一十三夜堂

中興幡譽上人の代、寛永十七年（一六四〇）四月に建立されている。明治二十三年（一八九〇）十月二十五日、境内別院龍光院を合併した。堂は間口三間、奥行二間である。

三夜まつり、二十三夜講が年中行事の一つであった。毎月二十三日、月の出を待ち、拝むために同信の人が集まり、二十三夜様の前で勤行をし、飲食を共にする講であった。三夜待、三夜供養などともいわれ、近年まで続いていた。

昭和六十一年（一九八六）五月に改築された。扁額は竹之内大順書で、西の二十三人衆、東の二十三人衆の額もかけられている。



6 淡島觀音堂

淡島明神本地仏は觀音で、女人の守本尊である。天保三年（一八三二）壬辰三月に造られて いる。

近郷の婦女子が詣でることが多い。また針供養は一ヶ月遅れの三月八日に行なわれていたが、最近は和裁を習う人も少ないため、詣でる人も少なくなった。



7 鐘樓堂

天保五年の打ちこわしの折の早鐘で、ひびの入った鐘であったが、戦時中、戦争に必要との理由で、国に献納させられた。昭和五十三年（一九七八）再建される。

毎年、大晦日には除夜の鐘を打つ檀信徒でにぎわう。また、様々な儀式の折、鐘がつかれる。



8 龍水井戸

寺地内に大きな白龍が棲み、境内にある井戸のところへ現われては、毎日水を飲んでいたといいい伝えがあつた。そこで人々はこの井戸を「龍水井戸」と呼んだ。今でも釣瓶井戸の滑車が残されている。

多くの檀信徒は、この井戸の水を飲み、極楽往生を願つてきましたといわれる。また亡者たちは閻魔の庁まで来ると、「龍藏寺の龍水を飲んだか、高野山永福寺の施餓鬼会に詣でたか」と問われた、とのいい伝えが語り継がれている。

豊富な井戸水は、今は水道となつて利用されている。



9 大銀杏

おおいのくちょう

樹齢六百四十八年余の銀杏木は樹周約四・三メートル、樹高約五十メートルの威容を誇つてゐる。木のこぶの大きさ、樹皮のごつごつとした感触、根元から無数に伸びる根宿り木も二、三本、枝の間から成長している。市内では他にみられない大木である。昭和五十年（一九七五）四月に「市の木」に指定されている。

まさに龍頭の名に恥じない大樹である。惜しいかな龍尾といわれる諏訪神社境内の木は落雷にあい枯れてしまつてゐる。



10 御朱印状

江戸時代の初め、増上寺を中心にして、関東十八檀林（僧の学問所）が形成される。増上寺より創建が約百五十年も遅る龍藏寺は檀林に加えられなかつた。近くでは岩槻の淨国寺や鴻巣の勝願寺が加えられている。

その後、三代将軍家光の時より、聖徳寺と共に龍藏寺も御朱印状を賜わつてゐる。

● 武藏国埼玉郡三俣村龍藏寺領

同所之内弐拾弐石余事任先規寄附訖

（同所之内二十二石余事先規に任せ寄附おわんぬ）

全可収納并寺中山林竹木諸役等

（すべて収納すべし、並びに寺中の山林竹木、諸役等）

免除如有末永不可有相違者也依如件

（免除有るが如し末永く相違あるべからざるものなり。よつてくだんの如し）

慶安二年十月十七日

光家

宗吉

享保三年七月十一日

武藏国埼玉郡三俣村龍藏寺領
同所之内式拾貳石餘事并寺中山林
竹木諸役等免除依當家先判之例
永不可有相違之狀如件
(永く相違あるべからず之の状くだんの如し)

慶安三年七月十七日

享保三年七月十一日

武藏國埼玉郡三俣村龍藏寺領
同村内式拾貳石餘事并寺中山林
竹木諸役等免除依當家先判之例
永不可有相違之狀如件

これらは将軍家より有力寺院へ出された一種の寄進状である。全国的にみても幕府膝元である関東、とりわけ武藏国に多く発給された。天正十九年十一月家康は関東八州の神社寺院に朱印状を発した。慶安年中家光の代に大量に発給された。原則的には將軍の代替りごとに出されたが、文面はほぼ同じである。

御朱印状は將軍から、免稅の土地を与えられたことを証明するお墨付きである。この書状に將軍の朱の御印が用いられていることからの呼び名である。そのため持ち歩く時の立札には葵の御紋が大きく記されていた。



第三章 護國青年道場

護国青年道場とは昭和十六年（一九四一）頃、仙台東北学院の教授、塚田新一と龍藏寺の方丈、由木隆定とによつて、龍藏寺に創設された護国思想を高揚する、近隣の多くの若者的心をとらえた運動体である。

その趣旨を次の誓願綱領（道場の理事長の由木隆定の名刺所収）に見ることができる。

護国青年道場誓願綱領

- 一、我が日本國々体は、唯一無上絶對の真理なるを信ず。
- 一、天祖の神勅を始め、御歴代の詔勅を畏み、之を明徴にし、拳々服膺して、誓つて其の聖徳を奉体せんことを期す。
- 一、道場員は、各々其の地位職能の尊嚴なるを自覺し、互に人格、學術、技能、体力の向上に努力し、誓つて皇國民たるの鍊成に精進す。
- 一、道場員は、上下同輩の間に久遠の因縁あるを信じ、誓つて師長を尊敬し、同僚相愛の精神を実行し、死生の境に至るも、苟も利己的の振舞あるべからず。
- 一、常に時局困難の真相を究明し、一死以つて奉公を誓ひ必ず之を克服し、八紘一宇の世界新秩序の確立を期す。

指導本部 東京市日本橋区小舟町二ノ八ノ二、電話・茅場町（六六）五〇四八番

道場在所 埼玉県北埼玉郡三俣村（東武線、加須驛下車、徒步十分）

以下、鈴木佳男氏の記述により、その運動を見ていくことにする。

護国青年道場

昭和十二年（一九三七）七月七日、盧溝橋事件にはじまる日中間の衝突を、七月十一日政府閣議に於て北支事変とよぶことに決定。國際法上の思惑から、宣戰布告は見送られ、形式的な外交関係の断絶をしないままの交戦状態だった。

現地交渉が続けられながら、局地的衝突が散発していた。東京朝日新聞七月二十九日付号外は、「皇軍の向ふ所敵なし」「暴支膺懲第一日の戦績」の大見出しの下、北平（北京）の包囲情勢を報じていた。第二次上海事変の勃発で、九月二日に支那事変の呼稱が閣議決定された。

以後戦局は拡大された。

現加須市、旧三俣村大門の淨土宗龍藏寺由木隆定方丈は、斯様な戦時体勢時代に危惧の念を抱いていた。他方、檀信徒の塚田新一先生が、仙台東北学院教授を定年退職され、生家の不動岡町下谷に帰郷された。

塚田先生と、若き由木隆定氏とは意氣投合され、戦時下若者たちにふさわしい精神教育を主とした護国青年道場を創設された。

設立年月日は不詳だが、皇紀二六〇〇年の昭和十五年（一九四〇）ころから道場創設案が図られたと推測できる。

加須市編纂当時の記録によれば、朝日新聞掲載記事の題目表に左記要項が記されている。

○昭和16・6・28（朝日新聞掲載記事）

三俣村龍藏寺内護国青年道場で、県下戦没将兵追悼会

三俣村龍藏寺内護国道場では、事変四周年を迎えて六日午後一時から、県下の戦没将兵および開拓民、青少年義勇軍隊員物故者の追悼会を執行し、終つて林銃十郎大将、香月中将、岡少将等の記念講演を開く。

龍藏寺に現在残された写真アルバムの、護国青年道場関係写真や、元護国青年道場員体験者のメモ等から、次の関係資料が確認できた。

昭和16・3・9（日）夜

本郷聯隊区司令部 堀江陸軍中佐

講演会開催—於龍藏寺

「陸軍記念日の夕」

昭和16・4・6(日)

樋遺川小学校に於て講演会

大政翼賛会 常任委員 葛生能久講師

昭和16・5・8(木)

護国青年道場主催

滿州、支那、泰、印度 各国大使が、自國の児童引率同道し、親善音楽会が開かれた。

※5月7日夜、龍藏寺にて準備会

昭和16・7・3(木)

護国青年道場主催

於 龍藏寺本堂

北埼玉郡内青年代表者（青年学校生徒および青年団員）

—戦時下精神鍛錬研修会—

護国青年道場員有志が興亞学院（東京所在）に通学して支那語を勉強す。

※興亞学院長——坂西利八郎陸軍中将

香月清司陸軍中将 講演

さらに、

県立不動岡中学校に於て

香月中将閣下の、生徒の閲兵分列

年月日不詳

龍藏寺本堂に於て講演会

講師 山本英輔海軍大将

同日、県立不動岡中学校生徒

山本海軍大将閣下のお話

昭和16・7・6

樋遺川小学校校庭に於て講演会

講師 元首相、陸軍大将 林銑十郎閣下

聴衆—樋遺川村民有志

昭和16・9・2

北埼玉郡下青年鍊成講習会

於 龍藏寺

昭和16・2・16(日)

龍藏寺本堂に於て講演会

講師 ラスピハリ・ボース氏(印度)

演題 「英米ヲ駆逐セヨ!!」

元首相 林銑十郎陸軍大將講演会

昭和十六年月日不詳

護国青年道場、樋遺川村地区道場員総出動のもとに、樋遺川小学校校庭で、

林元首相閣下の講演会が催された。戦時下の時局談をまじえた講演会は、近來稀にみる盛大な開催事業だった。

小学校会場に出迎えの樋邊川尋常高等小学校生徒の歓迎行列に、閣下は殊の外感銘を深くされ、見事な八字ひげに、ご満悦のお顔が眺められた由、村を挙げての大行事だつたと、後のちまで言い尽くされていた。

興亞女子鍊成講習会（昭和17・3・13～16）

青年道場、龍藏寺会場にして、近隣町村の女子青年百余名の研修会が開かれた。

塚田先生中心に鍊成講習会は進められた。

由木理事長により、「父母恩重経」の講話が、やさしく述べられ、真剣に聴く若き女性は、感動しながらメモ書きしていた。

道場員幹部が、種々講習会の世話をやかれていた。



林銑十郎陸軍大将講演会

千葉県閑宿の「誠道塾」生が、郵便局職員の身分で、塾から護国青年道場主催の三泊四日間の、女子鍊成講習会に出席参加させていた。

久喜町、曹洞宗天王院住職、高橋忠雄陸軍中尉が、「久喜皇國青年道場」長の立場で講演された。高橋道場長は、かつての「ノモンハン事件」体験を含めた時局講話だったという。

護国青年道場「幹部養成会」

護国青年道場創立間もないころと思う、龍藏寺庫裡入口前で、羽織、袴姿の道場幹部の方々が、指導者の塚田新一先生を囲み、厳肅な気持で写っている写真がある。先生を含め全員和服で下駄履き姿の十二名。

これから庫裡座敷で始まる幹部研修か、あるいは研修を済ませた後の写真撮影か。



護国青年道場幹部養成会（龍藏寺）

总裁 神林虎雄先生を迎えて

龍藏寺で、近辺在住幹部道場員が集まり、神林虎雄总裁（東京市世田谷区深沢町四丁目）を畳んで話し合いをなす。

由木理事長はじめ、背広その他上衣の右腕には、例の如く「魂」の文字入り腕章をつけている。

四王天延孝陸軍中将を迎えて

日本のユダヤ問題の權威者で有名な四王天延孝中将を迎えた、龍藏寺庫裡玄関での記念写真である。陸大徽章を佩用した四王天閣下のみ椅子に腰掛けている。

鼻ひげをつけた、由木理事長の不動岡中学時代の恩師不動岡中学校柔道嘱託教師の吉川栄先生が、閣下の隣りに立っている。

ノモンハン戦の勇士、高橋忠雄陸軍中尉が居り、隣りに塙田新一先生の背広姿が見える。

後列に略帽をかぶった道場員の兄（鈴木広司）と、最左端の黒詰襟服は、千葉県旧二川村（現閑宿町）の「誠道塾」から派遣された須賀七之丞青年



右より 由木理事長、○、○、○、鈴木広司、塙田新一、橋本朗、神林虎雄、新井晃一、島田武雄

の姿がある。千葉県二川村中戸山常敬寺に開設されていた青年鍛錬塾開設者深栖住職と交際のあつた由木理事長が、寺院関係で同様な青年道場のよしみで、泊りがけで護国青年道場に修行にみえた須賀青年を、紹介されていた。

ここには珍しく、由木理事長の顔が見えない。

四王天延孝陸軍中将（明治12・9・2—昭和37・8・8）（一

八七九—一九六二）

陸軍軍人、ユダヤ研究者。

埼玉県東松山市生まれ。旧前橋藩（松山陣屋）士西村茂兵衛の二男。東京府士族、四王天政彬の養嗣子。明治三十二年（一八九九）陸軍士官学校卒業。明治三十三年工兵少尉に任官。三十七年近衛工兵大隊大隊長として日露戦争に従軍した。三十八年大本營付、四十二年陸軍大学校卒業、関東都督府参謀。大正三年（一九一四）砲工学校教官、第一次大戦に大正五年（一九一六）から大正八年（一九一九）まで観戦武官としてロシア・イギリス・イタリヤ軍を視察し、フランス軍に従軍する。大戦後は西シ



四王天延孝陸軍中将を迎えて

ベリア出征及び関東軍司令部付でハルピン特務機関長として北満州（中国東北部）、シベリアで活動した。同十一年航空学校教官、下志津分校長を経て、同十二年八月～十三年八月軍務局航空課長在任。第一次世界大戦時のヨーロッパ各国従軍により総力戦の実態を体験したことから航空機の戦力的価値に着目、航空の大充実、新兵器の研究のためには七個師団の削減も辞さない覚悟が必要と力説した。

大正十三年（一九二四）八月少将昇任。同年から昭和二年（一九二七）の間は国際連盟で陸・空軍代表及び国際航空会議帝国代表として渡欧。同年豊予要塞司令官、三年第十六師団、第三師団司令部付を経て、四年八月中将に昇進、予備役に編入。

退官後は帝国飛行協会専務理事として民間航空の発展に尽力した。

昭和十七年（一九四二）東京五区から衆議院議員に当選。

軍務の傍らユダヤ民族の研究に従事、わが国ユダヤ問題の権威者となつた。また、日本反ユダヤ協会長、大日本回教協会長にも就任した。

昭和二十年（一九四五）十二月連合国軍に逮捕され、同二十二年釈放。享年八十三歳。

「埼玉人物事典」（三八六頁～三八七頁）



香月清司陸軍中将講演会

香月清司陸軍中将の講演会

昭和十六年（一九四二）七月三日（木）龍藏寺会場に於て、護国青年道場主催の時局講演会が開かれた。

講師の香月清司陸軍中将は、黒文字入り腕章「魂」を左腕に着け、黒シヤツを着た護国青年道場員全員で勲章佩用軍服姿の香月閣下を迎えた。香月閣下を真中に、神林総裁と岡少将閣下を左右にした記念写真は、見る者皆が威圧感を覚えるものがある。

写真は龍藏寺庫裡入口玄関前のお三人である。講演会開始前か後か、定かでない。

講演会終了後、近くにある県立不動岡中学校庭で、香月閣下が銃を持つ学生に訓話を述べている。

軍事教育を徹底していた石井潔校長先生からの依頼だったか、由木隆定理事長からの呼びかけがあつての香月中将講話だったかは、定かでない。生徒は中学四、五年の上級生と思う。配属将校か、教練指導教官のいずれかが、香月閣下の前方に位置している。



不動岡中学校学生への訓話

岡少将閣下の後ろ姿と、学校教師のパナマ帽姿が立合っている。

龍藏寺庫裡玄関前で、香月閣下たち三氏を囲み、青年道場幹部練と道場員の記念写真である。

香月將軍は佐賀県出身。明治三十五年（一九〇二）陸軍士官学校卒業。次いで陸軍大学を卒え、ドイツ駐在武官、陸軍省兵務課長、陸大幹事、陸軍歩兵学校長、第十二師団長等の要職を経て、近衛師団長となり、教育総監部本部長の重職を勤め、支那駐屯軍司令官として活躍された。

「魂」を染めた布製三角小旗が何本か見える。柿崎六郎加須町長、各町村有識者の顔ぶれは、護国青年道場支援を物語つている。

椅子にかけた塚田師範、香月、岡両閣下の真うしろに、胸に大型徽章を付けた由木理事長が立つてゐる。緊張感溢れた記念写真である。
後方に警察官の姿も見える。



香月中将と青年道場幹部

葛生能久氏、ラスピハリ・ボース氏

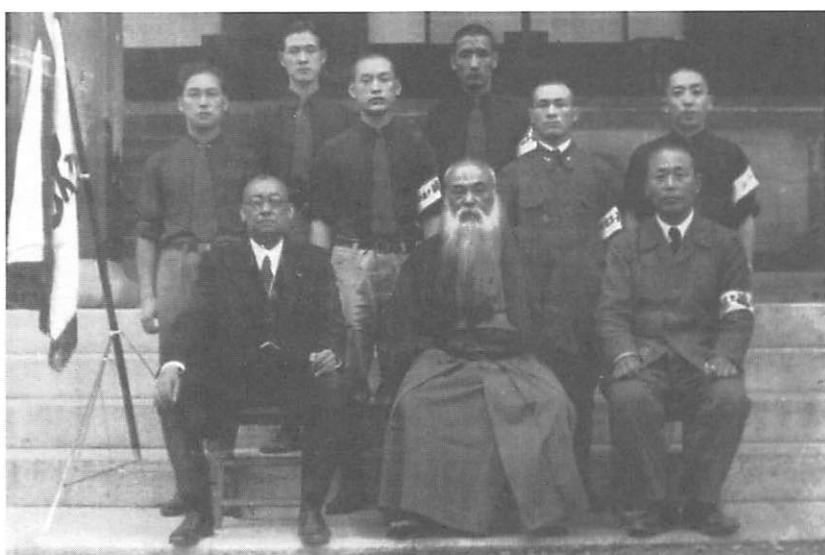
龍藏寺本堂前にて、由木理事長はじめ、道場員幹部たちと撮影の写真。「魂」が国旗の中央に書かれている。

黒シャツ姿の道場員。魂の腕章を左腕に着用。

両氏と前列に並ぶ塚田新一先生の姿が見られる。

黒竜会代表の葛生能久氏は、千葉県出身。氏は青年期から国粹運動とアジア主義に志を立て、明治中葉、故内田良平氏とともに壮士を集めて黒竜会を作った。中国革命の孫文、印度志士のチャンドラー・ボース氏らとも親交が深かつた。

昭和十六年（一九四二）四月六日（日）に、樋邊川小学校で、大政翼賛会常任委員の葛生能久氏の講演会が開かれた。聴衆は護国青年道場員や村民有志であつた。



葛生能久氏、ラスピハリ・ボース氏（龍藏寺本堂前）昭和16年2月16日（日）午後

昭和十六年三月九日(日)夜

護国青年道場、龍藏寺会場に、明十日の「陸軍記念日の夕」と称して、講師に迎えた本郷聯隊区司令部、堀江陸軍中佐の時局講演会が開かれた。護国青年道場員をはじめ、近隣町村の道場員が講演を聽講した。

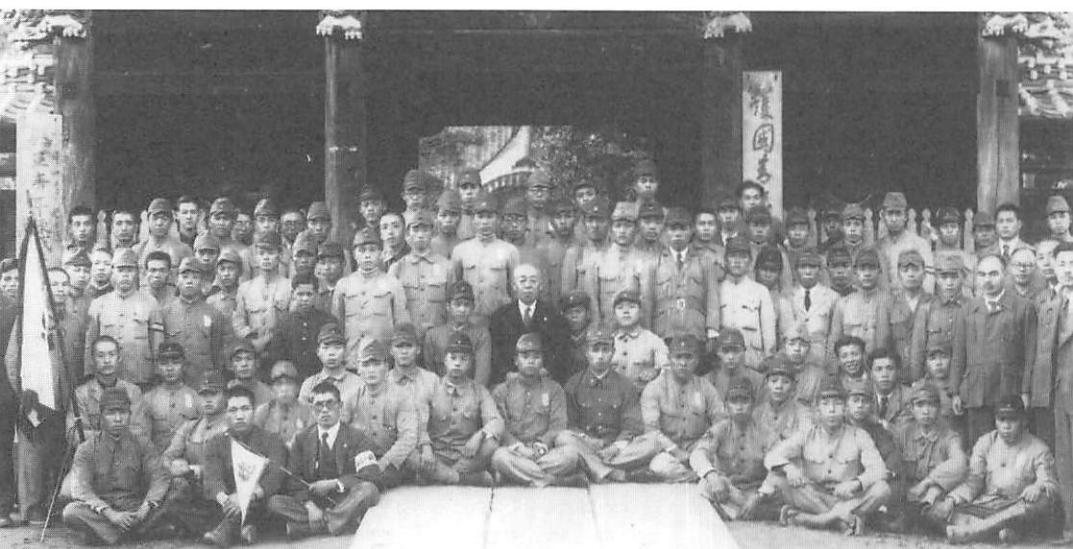
昭和十六年二月十六日(日)午後

護国青年道場、龍藏寺本堂に於て、印度志士、ラスピハリ・ボース氏の演題「英米ヲ驅逐セヨ!!」の講演が開かれた。

ラスピハリ・ボース氏は、印度より日本に亡命し、新宿に住んで頭山満黒竜会頭首・葛生能久氏より援助をうけていた。

北埼玉郡下青年鍊成講習会

昭和十六年夏、護国青年道場主催で、三俣村大門、龍藏寺に於て、北埼玉郡内青年代表（青年学校生徒及び青年団員）の、戦時下精神鍛錬研修会が開かれた。



北埼玉郡下青年鍊成講習会（昭和16年）護国青年道場主催、会場（三俣村龍藏寺）

龍藏寺山門前で写した、参加者全員の記念写真が残っている。中央に背広姿の坂西利八陸軍中将を囲んで、四隣町村有識者の顔がそろつている。

坂西利八閣下は、東京神田の興亞学院長（中国語学校長）。興亞学院は全国から中国語勉強に上京する生徒が多かった。

北埼玉共和村（現川里町）青年学校代表生徒三名が、龍藏寺会場の講習会に参加した。

その一人滝沢重春 元川里村収入役は、東京神田にあつた興亞学院中国語講習会に参加受講した経験が、陸軍現役兵として中支派遣軍にて軍務に精励した折、大いに役立つたと、護国青年道場に感謝の念でいっぱいであり、当時の中国生活をくりかえし話題にされる現在である。

昭和十六年七月二十八日（月）

護国青年道場員の男女有志が、坂西閣下の興亞学院中国語夏季講習に参加した折の、学院玄関前で撮影した記念写真がある。参加者は加須、三俣、不動岡、礼羽、樋内川に住む、徵兵検査が済み、逐次入隊が予定



陸軍中将坂西利八郎閣下が、三俣村龍藏寺、大日本護国青年道場へ講演に来られた折、東京の興亞学院中国語講習会の話をされた。道場員たちが、学院見学に上京したときの、スナップ写真。昭和16年7月28日（月）

されている道場員たちである。付添いの背広姿の道場幹部の姿もあり、大東亜戦争五ヶ月前の写真でもある。

道場師範 塚田新一先生

先生は明治十九年（一八八六）五月五日、不動岡村大字不動岡に、父塚田喜三郎、母のぶの三男として誕生した。

不動岡小学校から、埼玉県男子師範学校に進学し、卒業後は成績優秀を以て女子師範学校に訓導として奉職した。

その後も向学の念強く、東洋大学に学生として在籍し、更に東京神田の興亜学院に入學して、中国語を専攻し卒業した。

明治四十五年（一九一二）三月には、二十六歳の若さで抜擢されて、北足立郡（現浦和市）第一大久保小学校長に就任した。以後、北埼玉郡村君村、太田村、不動岡小学校長を歴任された。さらに大正十年（一九二一）四月には宮城県仙台市の東北学院高等部（現・東北学院大学）に、国語・漢文の教師として赴任した。その後、昭和二年（一九二七）三月には、教授に昇進した。

太平洋戦争が勃発した昭和十六年（一九〇一）に、時局に即応した大日本護国青年道場

を、現・大門町の龍藏寺方丈由木隆定氏とともに創設した。

総裁に神林虎雄氏をいただき、郷土の青年たちに護国精神の高揚を説いて、国策遂行に協力した。

海軍大将 山本英輔閣下の講演会

戦時中、礼羽村馬内、岡安正庫氏宅に疎開されていた山本英輔海軍大將の時局講演会が、護国青年道場で開かれた。

写真は、講演終了後、主だった道場幹部たちと、閣下を囲んでの記念撮影である。

さらに、県立不動岡中学校生徒への講演も開いたようである。

「ハワイ真珠湾特殊潜航艇」の九軍神

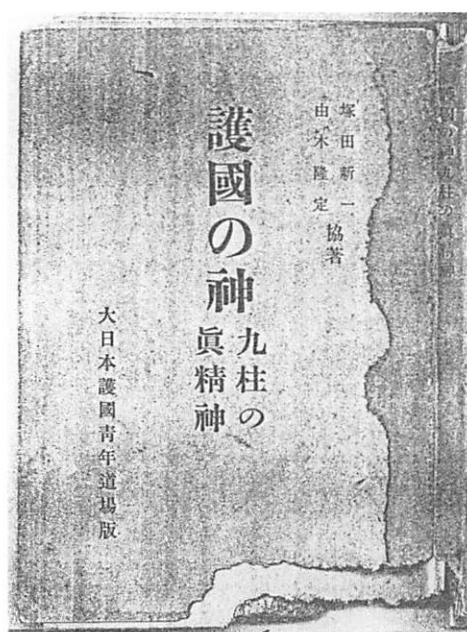
昭和十六年十二月八日太平洋戦争の緒戦を飾った、ハワイ真珠湾での岩佐直治海軍中佐以下九軍神の全家庭を訪ねてまとめられた著書『護国の神—九柱の真精神』は、護国青年道場師範塙田新一、理事長由木隆定両氏の共著である。百七十頁で、大日本護国青年道場発行（昭和十七



山本英輔閣下講演会

年十二月一日)である。

「本書は一柱一柱の軍神の家庭、郷土につき現地での調査により、その父母、交友、師匠等から得た活きた材料により、青少年としての九軍神の眞面目さを伝え、日本の子供としての生粋の性格、意志をなつかしく偲び、今後に生い立つ日本の子供をして之に学ばしめ、之に私淑せしめ、之に感激せしめ、来るべき更に大なる非常時に、二陣三陣と九柱軍人にふさわしき人物の出でんことを、深く念願するものである。」と、あとがきに記されている。



第四章 龍藏寺に係わる史料

「龍藏寺と教藏」は「加須市史」（通史編）から転載させていただいたものである。

龍藏寺縁起文

文和の頃はこの辺一体は開拓未だ普からず草莽蓬々たる広野にて、此処を流る、利根川は川俣附近より南流し荒川入間川を合せて江戸に注げり。

当時の利根川は川底隆起し、川瀬は幾筋かに分れ、鬼島、明知島等の洲島を生ぜり。鬼島は東西二百余間、南北七十間に及ぶ。明知島はその下流百五十間の所、大きさその半ばなり。奔流に三又をなせり

爰に三俣の渡口あり、適々慈智教藏上人布教の途次此渡口に来りて景勝賞覧の処、舟人來り備に地理を語りて鬼島に及ぶや、島内には怪物棲息し人々を悩すを以て恐れおの、き之を鬼島とよび敢て渡るものなしと、時に上人意とする処ありてこの鬼島の地に渡り、柴の庵を結びて称名七日に及ぶ。夜中女人來りて十念を授けられんことを乞へり、上人何者なりやと問ひしに此島に棲める白龍なりと答ふ、十念を授けんとするや女人忽百丈の大白龍と化す、龍身七曲して龍尾遙なり、十念終るや白龍みるみる形を失ひて以後人々の怪物に悩まさる、ことなかりしといふ。

白龍の首を抬げし地に一寺を創立し、白龍の龍、教藏の藏を結び、龍藏寺と名づけり。龍身の蛇涎七曲せし所を七曲とよび、尾の止りし所に辯天を勧請せり。龍頭、龍尾のありし箇所には各々銀杏を植へてこれを形せり。

時に文和四年乙未三月なり。

文政九年丙戌七月誌す

二十一世 懿 譽

龍藏寺と教藏

開設伝説

龍藏寺については『新編武藏風土記稿』によれば次のとおり記されている。

龍藏寺

浄土宗、京都知恩院の末、無着山龍光院と号す、元は仏眼山と号せし由、寺領二十二石は慶安二年八月賜へり、本尊阿弥陀は立像四尺余、慈覺大師の作なり、当寺は文和四年の草創にして、開山教藏上人明徳元年正月二日寂す、この教藏は淨土伝燈総系譜教藏慈智翁とのす、是なり、

また、『武藏国郡村誌』には、次のとおり記されている。

龍藏寺

寺域東西四十八間余南北五十二間面積二千五百十九坪 村の西南隅にあり 浄土宗
京都知恩院の末派なり 草創は文和四年三月にして開山は教藏上人と云ふ 伝説に

彼僧水俣の渡津を通りしに利根川の中に最も景勝の島なるを以つて島の名を船子に
問い合わせしに鬼島とて凡人恐る、島なりと聞き、彼僧此の島に一寺を建て、念佛の功力
に因りて年来鬼島に栖を為せし大なる白蛇脱しけり、故に仏眼山龍光院龍藏寺と号
すと、又十三代の僧幡誉上人のとき慶安二年十月靈地高二十二石を賜う星霜を累て
天和元年七月十日の夜火災に罹り堂舍灰燼となり什宝も焼亡し其後再び文政六年正
月焼失するにより今の堂舎を建設せりと

このことから龍藏寺は文和四年（一三五五）教藏上人によつて、創建されたものである
ことが分かる。

また、龍藏寺創建について、次のような伝説がある。

教藏上人が行脚して三俣の渡し口にきて、河中に三つの州をみられた。非常に美しい風
光であったので上人がこれをほめたところ、船子は「東は明知島、西は鬼島、中にあるの
が中島で、鬼島には怪物がいる。人々はこれに悩まされることが多いので、誰もおそれて
そこに行くものがいる」と語つた。このため、上人は衆生済度のため怪物を得脱させよう
と思つた。そこで上人は鬼島に渡つて柴の庵をつくり、日夜称名念佛された。その時、一
夜怪しき女性がきて、「自分はこの島に住んでいる白龍である、どうか十念を授けてほし
い」と頼み込んだ。そこで上人はその正体を顕わせと反問さると、天地が震動してたちま

ち百丈の一大白龍となつた。上人が十念を授けられると龍は得道してその形が消え失せてしまつた。その龍の頭のあつた場所に今の龍藏寺（寺の名は白龍の龍と教藏上人の蔵をとつて命名された）が建立されたのである。現在本堂の前にそびえ立つ銀杏の木が龍の頭のあつたところといい伝えられている。龍の尾の止まつた所には弁財天（現・諏訪神社）をお祀りしたが、これは一三五五年（南朝の正平十年、北朝の文和四年）のことであるといい伝えられている。龍藏寺より諏訪神社にいたる間は通称七曲り大門と称して、その屈曲した形状は白龍の蜿蜒した跡であるいわれ、龍藏寺の由木義紹住職によると、葬儀の際、葬列はこの七曲りの道をとおることになつていたとのことである。

古仏眼山の由来

龍藏寺は古仏眼山と号し、聖徳寺と同じく浄土宗鎮西派に属し京都知恩院の末寺である。

古仏眼山の由来については「埼玉叢書」第六巻の「岩付淨国寺仏眼舍利縁起」に、

（前略）

上人此告にまかせ諸国修行して尾州熱田に至り三七日説法す、貴賤の聴衆夥し三七日の終に説法の座へ天花ふり紫雲たなびきて、数万の人感涙を流し異口同音に高声に念佛す、此時宮殿忽に震動して内より御戸開こそ不思議なれ、其比社務某は聊の

過によつて籠舎してありしが上人の説法を伝聞、浦山敷思い心中に念じて曰く、我籠舎の身なれば行て説法を聞事とあたわざせめて十念を受けたしと思ひければ上人遙かに此念をしり籠舎へ行て十念を授けらる、其時社務籠舎の子細を委語て、願は上人上京の次手に此の籠舎の義を御歎給はれと云て涙を流しぬ、上人不便に思いて都に登り奏聞せしかば遂に勅免せらる、其後上人下向の時又熱田にて宿す、彼社務謝礼して曰我上人への報恩に当社の靈宝拝ませ申さんと云て、数多の宝物を上人に拝せしむ、此時宮殿の角に封じたる物あり、上人尋給へば社務答ていわく、唐の玄奘三藏天竺より持來り太宗皇帝に奉る、それより伝て玄宗皇帝に至る玄宗帝其后揚貴妃の為に勅使を立て七種の宝を此宮に納らる、其七種の中にこの舍利第一也と云、上人驚喜して曰我はこれ沙門なれば苦しかるまし殊更此舍利は當社靈宝の第一なれば旁以て叶えられずと云、上人大いに怒て曰我汝が籠舎を救て一命を助けぬ、（中略）此舍利吾に与えよ、我等の靈宝として廣く衆生を利益すへし、社務驚て曰勅封切さへ憚多に与うる事は思ひもよらず、上人是非をいはず乞求て持帰り龍藏寺の靈宝とし、此由來を書し年月を記して曰く、

明徳元年庚午正月二日満八十教藏云云

（後略）

と記されている。

『龍藏寺縁起』では教藏上人が舍利のほか、釈迦の左眼、阿南の白毫払子、玄宗皇帝親筆の三部経等を持ち帰つて、鬼島に龍藏寺を建立して、仏眼山大白院龍藏寺と号されたといふ。しかし、靈元天皇の御宇天和元年（一六八一）七月十日火災に罹つて、すべて灰燼に帰したといわれている。ただし、仏眼（釈迦の左眼）はこれより先、本寺の維持の都合により金十両で加倉の浄国寺に預けられていた。しかし、これを受け戻そうとしたところ、浄国寺の僧は俄かに欲念を起こし、十の上にノの字を加えて金千両としたため、遂に受け戻すことができなかつたといふ。それから龍藏寺は古仏眼山といわれるようになったといわれている。しかしこの間の事情は次の「岩付浄国寺仏眼舍利縁起」にみられる事情と相違しており留意されよう。

兵乱の時仏眼他人の手に渡り遂に岩付へ持ち来る、ここに一人の清信士菅原某という者あり、即ち是を求め得て朝夕礼拝供養す、其頃鴻巣勝願寺中興の主惣誉清巖上人岩付へ隠居して一字を建立し浄国寺と名づけて開山祖となる。菅原氏深く帰依して彼の仏眼舍利を浄国寺へ寄進す、清巖和尚大に悦してその謝礼として銭三拾貫文を送らる、岩付の城主氏房始め舍利を信ぜず、ふくさ包の上に置き、鉄鎧を以て打ち其偽を試しけるに、右碎鎧くぼむといえども、舍利は碎れず本のままなり、城主大いに後悔して清巖和尚と相議して浄国寺の山号を仏眼山と名付けらる。

龍藏寺の歴史

由木義文（ゆうき・よしふみ）

発行者：由木義文

発行所：古仏眼山龍藏寺
〒三四七・〇〇六八 加須市大門一八・五一

制作：薬師神デザイン研究所
〒一五〇・〇〇四一 東京都渋谷区神南一・五・一四

印刷：中央印刷株式会社
〒一六二・〇八一四 東京都新宿区新小川町四・二四

一九四四年 埼玉県加須市に生まれる
一九六七年 慶應義塾大学文学部卒業
一九七四年 東京大学大学院人文科学研究科
印度哲学博士課程修了
一九八一年 印度学仏教学會賞受賞
現在 在 龍藏寺三十世住職
慶應義塾大学講師

〔主な著書〕 「日本佛教思想史」 「東国の佛教」

「やさしい歎異抄たつた一度の人生だから」
「阿弥陀經」「最澄」ほか多数。

発行：平成十五年七月一日

非売品